



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ロシア・ソヴェトの東漸：シベリアの問題（その一）
Author(s)	山本, 敏; Yamamoto, Satoshi
Citation	スラヴ研究, 14, 1-8
Issue Date	1970
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5000
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112919.pdf



ロシア・ソヴェトの東漸

——シベリヤの問題—— (その一)

山 本 敏

1.

われわれがここにシベリヤを採上げるのは、単にその今日的な経済価値によってのみではない。ロシア・ソヴェトの経済的発展の過程で、シベリヤは切札的な役割をもつと言われているが、そのことは一体何を意味するのか。それがいまいだいている問題の第一である。そしてその中から、「ソ連型社会主義」の発展の特性を求めたい、これが問題の第二である。

2.

この地域についての見聞記や調査、研究書は、「北槎聞略」をはじめとする邦語文献も今や数え切れない量になっている。明治期の二葉亭四迷の旅行記なども、現在われわれがロシアの将来をどのように考えるかという場合、多くの示唆を与えてくれる。その後の黒田乙吉、大橋与一氏等による着実な研究は、両氏等が生きてきた日本の政治的風土を勘考するならば、われわれに無限の教訓とはげましをあたえ、多くの問題を投げかけている。例えば、「ソ連国力の東漸は、ロシア時代からこの国の宿命でなかったろうか。」¹⁾という黒田乙吉氏の言葉は、われわれに大きな課題を投げかけているように思われる。

洞富雄、高野明氏等による日露、日ソ交渉史の研究業績も、われわれがロシアないしソヴェトを対象として扱う場合に欠くことのできないものになっている。

第二次大戦以後、加藤九祚氏によってはじめてまとめられた「シベリヤ史」²⁾、相田重夫氏による「シベリヤ外史」³⁾が出版され、漸くまとまったシベリヤ研究の成果が世に出てきた。シベリヤの開発についても、石井浩、池田博行氏等の刻明な仕事が世に出てきた⁴⁾。これら諸氏の仕事は何れも、日本に於けるシベリヤ研究の新時代を代表するものと言うべきであろう。

西欧におけるシベリヤ研究の中心は、ドミトリー・シムキン教授（イリノイ大学）の主宰するアメリカ・グループとロンドン大学スラヴ東欧研究所のグループである。だが、これらの西欧のシベリヤ研究は、それぞれの国に於けるロシア・ソ連研究の主流をなして

- 1) 国立国会図書館調査立法考査局資料 B 146 「ソ連経済力の東漸——シベリヤ開発計画の目指すもの——」昭32年6月、同局、p. 1.
- 2) 加藤九祚：シベリアの歴史、紀伊國屋書店、1963.
- 3) 相田重夫：シベリア流刊史、中央公論社、昭42.
- 4) 石井 浩：シベリア開発、ダイヤモンド社、昭38.
池田博行：シベリア経済開発の実態、東大出版会、1964.
池田博行：シベリア経済史、アジア経済出版会、1968.

いるのではなく、ロシア近代史研究の一つの盲点として、東部地区を研究対象としているものが多い。尤も、そのこと自身、きわめて重要なことではある。例えば、エム・ラーエフ氏の仕事⁵⁾や「極東緩衝國家」を研究しているエム・スミス氏(プリンストン大学)などが、ロシア近代史研究の前進のために大いに貢献するであろうことは疑いない。

ここで一言述べておくと、これら西欧の研究者たちに会うと、異句同音に、日本こそシベリヤ研究の一大中心であるべきだと言うことである。それらの言葉が、日本の位置する地理的条件や経済的必要性に基いて、あるいは時として軍時的必要性に基いて発せられたものであるにしても、われわれとしては銘記しておかねばならぬことであろう。

本国であるロシア、ソヴェトにおけるシベリヤ研究の状況はどうか。もちろん、エス・バフルーシンのものをはじめとして、古くからの数多くの古典的な文献は枚挙にいとまがないが、1968年から69年にかけて出版された「シベリヤ史」5巻⁶⁾に、その一つの集約を見ることができよう。とくにソヴェトにおける研究業績について論議するばあい、その業績を産み出した個人個人の能力よりも、それをとりまく研究体制、研究組織について重点をおいて考えなければならない。われわれは、とくにこの「シベリヤ史」5巻が、現地シベリヤの所産であることに注目し、「科学都市ノボシビルスク」が、すでに現実的な活動期に入っていることに刮目せざるを得ない。ソヴェト時代に入ってからシベリヤ研究史の一覧も、ここノボシビルスクで発刊されている⁷⁾。ア・イ・アンドレーエフの古い時代のシベリヤの史料研究書⁸⁾も、ここで見落とすわけにはいかない。さらに1956年、戦後復興5ヶ年計画が終って“平和共存”の政治スローガンを打出し、ソヴェトの学術研究体制が或意味ではソヴェト時代になってはじめて落ち着いて、学問研究に打込もうという時期に、ヴラジヴォストークを会場とする科学アカデミー歴史部門と科学アカデミー極東支部の合同討論会が開かれた。このときの報告、討論を主体とした論文集⁹⁾も、今後ソヴェトの東方研究の動向を見極める上に見落とすことのできない貴重なものである。これは、集録された個々の論文に盛られた今後の研究は在来の「西部から見た東部研究」でなくて、東部そのものの中に足をつけ、東部そのものの中からはじみ出てくるような研究が必要であるとする主張が、学術研究体制の中でのソヴェト民主主義の主張であるという意味でばかりでなく、このような討論会が現地で開催され、現地の多くの研究者たちが学術体制の全体組織の中で活力を得てきたという意味で貴重なものである。

このような流れの中で、シベリヤ開発の問題を取扱った個々の著作も数限りなく出版され、その数は加速度的に増加している¹⁰⁾。

-
- 5) Marc Raeff, *Siberia and the Reform of 1822*. U. of Washington Press, Seattle, 1956.
 6) АН СССР, Отделение истории АН СССР, Сибирское отделение, Институт истории, филологии и философии; История Сибири с древнейших времен до наших дней. В 5 томах, Л. Изд., “Наука”, 1968-69.
 7) АН СССР, Сибирское отделение, Историография Советской Сибири (1917-1945), Изд. “Наука”, Новосибирск, 1968.
 8) А. И. Андреев, *Очерки по источниковедению Сибири*, Изд. АН СССР, М. Л. 1960.
 9) АН СССР, Отделение исторических наук, Дальневосточный филиал; Сборник статей по истории Дальнего Востока, Изд. АН СССР, М. 1958.
 10) それらの一部は、前記石井浩、池田博行氏の著書の巻末に列挙されている。

3.

さて、戦前のわが国の一般にロシアないしソヴェト研究は、日本の対露ないし対ソ軍事戦略の立案を直接課題とした陸軍参謀本部を中心とする軍事研究と、ロシア革命を絶対神聖なるものとし、ソヴェト社会主義の下ではあらゆる社会問題がすべて解決されるとする左翼陣営のそれとが、相交わることのない二つの大きな流れとなっていた。そして、その中間がなかったのである。

問題を東部、シベリヤおよび極東地方に限った研究の場合も、大体において同様の在り方であった。日本におけるこのような研究傾向は、現在の時点に到っても、まだ完全には解消されていない。

日本におけるロシア研究の姿勢について、大正末期に発せられた研究者の声を代表するものとして、浅野利三郎氏の言葉を引用してみよう。

「邦人の露西亜を研究するに当り、動もすれば政治家は乃ち政策上より、軍人は乃ち軍事上より、文学者は専ら文芸上より、実業家は専ら経済上より之を観察せんとす。斯くの如くにして露西亜を論ぜんとするは、恰も群盲の象を摸して其の全体を論ずるに等し。人誰か之を笑はざらん。」¹¹⁾

また、

「或は人種に重きを置きて説を成す者あり。或は自然に重きを置きて論を立つる者あり、或は歴史に重きを置きて他を顧みざる者あり。何れを重しとし、何れを軽しとするも悉く偏頗たるの誹を免かれず。況んや此の三者を究めずして漫然露西亜を語るに於てをや。」¹²⁾

と述べたロシア研究のこの一先達の言葉は、今日のわれわれの耳にも、脈々たる生氣をもって響いてくる。

浅野氏は、「露西亜は強大なる我が隣国にして、兩國の間に不断の交渉ある。蓋し是れ地理上の宿命なり。」¹³⁾として、地理学者の立場をとり、ロシア・ソヴェトの発展については人種と民族に重点を置いて論を立てていた。それはたとえば、「欧羅巴の文明諸国と全然隔離せる農業的封鎖国の裡に異種の社会群が露骨なる民族闘争に終始したる鮮明なる過程は、即ち方に露西亜歴史の全内容なり。」¹⁴⁾と言う一つの言葉を引用するだけで充分であろう。

ここでわれわれは早川鉄男氏の著書¹⁵⁾をとりあげる。この書物は、ガリ版刷り、限定500部の非売品で、石井、池田氏等の著作が出版されるより数年以前のものである。「従来のソ連の発展は、欧露の経済開発と工業化を中心とするものであるが、それがようやく限界に達しようとしている現在、ソ連として、今後の発展がウラル以東の豊富なる未開の資源にまつことますます多く、経済圏を漸次東方に拡大して、その発展的経済均衡を

11) 浅野利三郎：ソウエートロシアの歴史地理的研究，大正15年，政教社，p. 1.

12) 同 前 p. 2.

13) 同 前 p. 1.

14) 同 前 p. 2.

15) 早川鉄男：ソ連極東資源産業要覧，国際調査社，昭和33年。

画することは、当然の進路である。それは恰もアメリカが、まず東部地域を本拠として発展し、漸次フロンティアを四方に拡大することによって、東西両洋における現在のアメリカの均衡的経済構造を確立し得たのと、ほぼその軌を一にしている」¹⁶⁾。

この書物への序文の中で、佐倉重夫氏はこのように述べている。これは、とくにロシヤないしソヴェト経済を専門としない経済学者としての佐倉氏の、言ってみれば穏当な見解と言える。つまり、一般に日本の経済学者たちの平均的な見解であろう。

佐倉氏はさらに続けて、次のように述べている。

「ソ連はすでに、第6次5ヶ年計画では、総投資額の半を東部開発に投入しようとしているが、その対象は東部と言っても、主として中央アジアおよび西シベリヤではある。しかし、やがてはさらに東漸して、開発が太平洋に達することは順序であり、それは、ソ連の目標でもある。したがって、東シベリヤおよび極東は今後にもっとも可能性を内蔵する地域として着目せられ、その開発の暁には、ソ連は優にアメリカに対立しうる経済構造を達成し得るのである。そればかりではない。これによってソ連は、太平洋においてより大なる役割をつとめ、また東亜において、ますます大なる影響を有すべく、日本としても、いや応なく対ソ関係はますます重大となるものとみななければならない。」¹⁷⁾

ここに言う「ソ連の目標」という言葉は、どのような内容を前提として用いられているのであろうか。前述した日本におけるソ連研究の二つの流れが、夫々にまったく異なる結論をもっているように、この言葉の解釈にも二つの互にまったく相反する内容が前提されているように思われる。佐倉氏の言葉の中からは、それが何れの方のものであるかは明かにされていないが、同じく早川氏の著書に寄せた森武夫氏の序文を併記してみよう。

「地政学者マハンが『海上権力史論』において次のように言っている。

ロシヤという一大内陸勢力は、本能的に暖海への出口を求めていたが、大西洋へは半ば内陸国たるドイツをはじめとし、西欧周辺勢力、さらに大英帝国という海洋勢力の抵抗にあって進出ができなかった。

印度洋への出口も天候とこれまたイギリスの海洋勢力に阻まれて獲得し得なかった。

最後の望みとした太平洋へは、長遠な道程と厳しい自然的条件と闘ったとはいえ、ほとんど政治的抵抗なくして進出することができた。ロシヤはここに、内陸、海洋両勢力兼備の大強国たるの姿勢を勝ち得た。」¹⁸⁾

というマハンの言葉を引用した森氏は、かくて「ソ連は今やこの重要な太平洋水域に面する極東内陸の近代化、工業化に着手している」¹⁹⁾としている。

同じく早川氏の書物に序文を寄せた甲谷悦雄氏によると、

「日ソ復交前後から日本国民の間で、極東ソ連ないしはシベリヤの産業開発状態への関心が高まるにつれて多くの論稿が発表されたが、それらは何れもソ連の公式発表を基礎として、それをそのまま伝えるようなものであった。」²⁰⁾

16) 佐倉重夫：前掲書への序文。

17) 同 前

18) 同 前

19) 同 前

20) 同 前

甲谷氏によると、これに対して早川氏の研究のように「古い基礎的な豊富な資料に、新しい多くの資料を加えて、各種の角度から系統的に検討し、吟味し、組織的な研究成果として発表されたものは、他にその例を知らない。」²¹⁾ということになる。ただ、残念なことに、本書を見る限りでは、「古い基礎的な資料」がどのような内容のものであるかが明らかにされていないので、にわかに甲谷氏の言葉に相槌をうつことはできない。

ソヴェトの東部開発を早川氏はどのように見ているか、早川氏自身の言葉を引用しよう。

「第7次5ヶ年計画以降本格的に取り組むであろう極東ソ連の開発並びに建設は、米との力の均衡関係、とくに軍事的な面で大きな影響を及ぼすであろう。この軍事的な面からの日本への影響と、さらに、今回調印された日ソ通商条約に基く貿易にも重大な意味をもち、単なる隣接国の発展とのみは見出し得ないものがある。」²²⁾

この言葉は、ソヴェトの東部開発の方向についての早川氏の解釈を明らかにしているし、それは日本における二つの大きな流れの一方を代表するものと言うことができよう。すなわち、まづ第一に軍事的な視点をとっているという点である。

早川氏の著書と前後して出された前記黒田乙吉氏の執筆した国立国会図書館調査立法考査局資料 B 146 は、ウエ・エフ・ワシューチン教授とイ・エフ・デヴォシヤン大使の所論の紹介を主要な内容とするものであるが、ロシア時代とソヴェト期のシベリヤ経営を歴史的に概観して、「カザークによるシベリヤ遠征が、ロシア勢力東漸の第一期なら、5ヶ年計画によるソ連のシベリヤ開発は、まさに第二期の東漸であった」²³⁾とする黒田氏のとおりまとめは、われわれにとって多くの示唆に富んだものであるように思われる。

黒田、早川両氏の後に出版された石井浩、池田博行両氏の著作は、着実、詳細で、通常の意味で言うならば遙かにまっとうな書物であるが、本稿の主題に従ってこれらに立ち入ることを避けることにする。

4.

さて問題を「ロシア・ソヴェトの東漸」にしぼって論議を進めることにしよう。

第6次5ヶ年計画の時期に於ても、シベリヤ開発の問題点は、その労働力を如何にするかという点にある、とは内外の多くの人によって指摘された。しかし、シベリヤ開発における労働力不足の問題を、その原因の追究からはじめて正面から取り組んだ研究書は、実はまだ見当たらないのである。

さかのぼって、5ヶ年計画を準備していた時期の Gosplan の責任者であったクルイジャノフスキーも、「移住は我が国が第一次大戦以前の水準以下に止まっている唯一の領域である。革命後現在(1927)迄に60万人が移住したにすぎなかったが、戦争の時までは1906年から1912年までに256万人が移住したのである」²⁴⁾と述べて、問題の所在を指摘

21) 甲谷悦雄：前掲書への序文。

22) 前掲書：早川「まえがき」より。

23) 前掲、国立国会図書館調査立法考査局資料 B 146, 昭32, p. 8.

24) クルイジャノフスキー、高山洋吉訳；5ヶ年計画前のサヴェート経済、白楊社、昭6, p. 40 参照。

している。

このシベリヤへの移民問題は、上から、すなわち体制側からはどのようにとらえられていたであろうか。ソヴェト時代になってからは、「生産力の適正配置」論の中に解消されてしまっているように思われるが、ロシア時代の一つの例をストルィピンの場合にとって考えてみよう。

「シベリヤはすべてにおいて富んでいる。ただ、人だけが不足である。シベリヤは、発洩たる労働力がロシアから流入しさえすれば、経済的、文化的に繁栄へとむかうことができる」²⁵⁾と述べてかれは、シベリヤの問題は労働力の問題であることを大胆に指摘し、「シベリヤにおいてもっとも重要な国家的事業は移民問題である」²⁶⁾と断言している。

ストルィピンの場合、考えなければならないことは、シベリヤ移民がヨーロッパ・ロシアに対してどのような意義をもっていたかということであった。かれの考えでは、大雑把に言って、シベリヤへの移民はヨーロッパ・ロシアにおける人口の自然増加の半分にも及ばなかった。移民運動のとくにさかんなロシアの南と西、さらに黒土地帯においては、耕地面積がすでに全平地面積の40%を占めており、放牧地も鋤き返されていて、人口の増加が30~40%と播種面積の増加率を超過しているので、耕地に対する人口の過剰が重荷となりはじめていた。理論的には、ストルィピンの言うように、「労働力の一部は工業の発展によって利用せられる」²⁷⁾筈であり、「農業の組織化と農業的措置によって、農業労働の生産性を増大し、同一空間上でより多くの人間を養う可能性を与える」²⁸⁾ことができた。しかし、現実的には、技術の改善に何等の興味も示さず昔変らぬ農耕方式をとっていた農民の一部がシベリヤに向って流出して行くことは、多くの県にとって好ましい影響を与えていたのである。

しかしながらかれは、「移民運動の間接の結果を強調するなら、同時にそれらが、すべて第二次的の結果であって、それを誇張してはならぬということに注意せねばならぬ」²⁹⁾とし、人口過剰に悩むヨーロッパ・ロシアの農村、農民問題の解決のために、シベリヤ移民が非常に有効であるという所論が、どんなに魅惑的なものであろうとも、安易にこのような考え方のとりこになってはならないといましめた。かれによれば、シベリヤの移民がヨーロッパ・ロシアの農村経済に大きな影響を与えるようになるのは、移民の数が年間100万人に達してからのことである。主たる移民送出地であるヨーロッパ・ロシアの西部地帯の人口が稀薄になることは、ロシアの独立にもかかわる問題を誘致し、政治的にも経済的にも希ましいことではないとかれは考えたのである。ストルィピンのこの考えを裏付けるように、当時ドイツにおける第一級のシベリヤ研究者であったアウハーゲン教授は、「ドイツにとっては、世界市場におけるシベリヤの将来の役割よりも、ロシアの移民運動の農業関係への影響とヨーロッパ・ロシアの人口減少にたいする影響の方がはるかに重要

25) ストリーピン、クリヴォツシエン、川俣浩太郎、石田朗訳、シベリヤ移民論、国土計画資料第12輯 昭26, p. 12.

26) 同 前 p. 12.
 27) 同 前 p. 129.
 28) 同 前 p. 129.
 29) 同 前 p. 131.

である』³⁰⁾とし、若しこのような考え方を発展させて行くならば、「ロシアの人口のヨーロッパ・ロシアからアジア・ロシアへの大量の送出によって利益を得るものありとせば、それはこの隣国ドイツであるということができよう』³¹⁾と述べている。

ストルィピンとしては、東方に顔を向けることによって西方ドイツの圧力をうけるおそれがあるばあい、慎重にならざるを得なかった。そしてかれは、「ロシア人を人為的にロシアから汲み出すことは誤りであろう。人為的に国境地方にもって行くことのできる我国の力弱き下層階級は、移住地に定住することを知らず、多くのばあい、故郷にふたたび帰ってきて、全般的な貧困を増加する。アジア・ロシアに対すると同様、ヨーロッパ・ロシアに対する移民の運動の効果も、結局のところ、移民がウラルの彼方において幸福になり得るか否かにかかっている』³²⁾として、シベリヤ移民について積極的に具体的な措置をとるのを避けたのである。

その後シベリヤ開発の問題が重点施策として採上げられたのは、ソヴェト時代になって1937年に、第3次5ヶ年計画が発表されたときである³³⁾。このときはじめて計画目標の重点事項として採上げられた東部の開発は、その直後に突入したドイツとの戦争に於て、軍事的な意味でも非常に時宜を得た措置であったことから、独ソ戦がすでにこの時期に於てソヴェト側で決定されていたとか、ソヴェトの東方政策はすべて軍事優先であるとかいう所論の根拠となっている。しかし、そのためには、この時点でのソヴェトの政策決定を裏付ける資料の討究が、まだ必ずしも充分とは言えないように思われる。

ともあれこの第3次5ヶ年計画時の構想は、第2次大戦期をはさんで大分遅延するが、第6次5ヶ年計画において大きな国家投資の下に着々と結実するのである。

このようなソヴェト経済力の東漸方向は、その根源をどこにもつのか。それはロシアの問題なのか、ソヴェト体制の問題なのか、あるいは極く単純に、「そこに資源がある、だから開発する」のであろうか。(以下次号)

30) 同 前 p. 132.

31) 同 前

32) 同 前

33) もちろん、国内戦の時期におけるシベリヤおよび極東の問題は、当時としては喫緊であったが、ここでは開発と建設の問題に限ることとする。

Продвижение России и СССР в восточном направлении

— Проблема Сибири — (I) .

Ямамото Сатоси

Автор поставил вопрос относительно Сибири не только с точки зрения её сегодняшней экономической важности. Он, рассматривая проблемы экономического развития в восточной части СССР, исследует объективные условия, касающиеся особенностей развития социализма в Советском Союзе. Таким образом, автор вносит свой вклад в развитие так называемой теории “Модернизации слаборазвитых стран.”

(Продолжение следует в следующем номере этого журнала.)